

## 夏ニラにおける肥効調節型肥料を用いた省力施肥法

○手嶋康人, 衛本静枝  
(大分農林水産研野茶)

### 【目的】

ニラは、定植後90~120日程度株養成した後、25日間隔で4~7回程度収穫を繰り返す。夏ニラ4回収穫の場合、株養成中に3回、収穫中に3回追肥を行っており、多大な労力を要する。そこで、肥効調節型肥料を用い施肥回数を減らした栽培法を確立するため、肥料の種類と基肥の施用量が収量、品質に及ぼす影響について検討した。

### 【材料及び方法】

供試ハウスは間口6.3m、長さ20mの単棟パイプハウスを用いた。供試土壌は腐植質黒ボク土。前作にニラを栽培し、試験開始前の土壌の有効リン酸は40.5mg/100gであった。基肥施用前に牛糞堆肥を250kg/a施用した。2008年3月18日に基肥を施用し、セルトレイで育苗したニラを3月25日に条間27.5cm、株間25cmで1ヶ所3本定植し、露地条件下で株養成を行った。品種はスーパーグリーンベルトを用いた。追肥は1回目収穫後の7月21日に施用した。

### 【結果及び考察】

1) 7月20日に収穫を開始し、4回の合計収量は、NKロング25区が745kg/aで最も多く、次いでロング25区が731kg/aであった。ロング20kg区、NKロング20kg区が103%で、いずれも対照区を上回った。ロング、NKロングともに25kg区が20kg区よりも初期収量が多く、合計収量も多くなった(図1)。

2) 茎数の合計はロング25kg、NKロング25kg区はニラ化成と同等であったが、ロング20kg、NKロング20kg区はやや少なくなった(表2)。

3) 葉色は収穫回数が多くなるほど薄くなる傾向にあったが、処理による差は小さかった(図2)。

4) 肥料コストは、エコロング424では大分ニラ化成1号の182%、NKエコロング424では105%となった。

以上のことから、緩効性肥料100日タイプを基肥として窒素施用量25kg、1回目収穫時の追肥に窒素施用量20kg施用すると、株養成中及び2回目以降の追肥を行わなくてよく、ニラ連作圃場に堆肥を投入し、NKロングを施用することにより、慣行施

肥と同等以上の収量が得られ、同程度のコストに抑えられることが明らかになった。

表1 試験区の構成

区	基肥量	追肥量	合計
ロング20	N2.0kg/a	N2.5kg/a	N4.5kg/a
ロング25	N2.5kg/a	N2.0kg/a	N4.5kg/a
NKロング20	N2.0kg/a	N2.5kg/a	N4.5kg/a
NKロング25	N2.5kg/a	N2.0kg/a	N4.5kg/a
(対)ニラ化成	N1.51g/a	N4.2kg/a	N5.71g/a

ロング: エコロング<sup>®</sup>424 (14:12:14) -100  
NKロング: NKエコロング<sup>®</sup>203 (20:0:23) -100  
ニラ化成: 大分ニラ化成1号 (16:10:14)

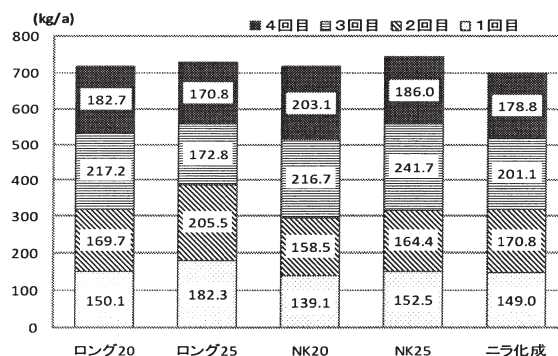


図1 肥料の種類と収量

区	1回目	2回目	3回目	4回目	合計
ロング20	13.8	19.8	28.5	30.0	92.1
ロング25	16.2	21.9	27.5	29.1	94.7
NKロング20	13.0	19.8	28.4	30.2	91.4
NKロング25	13.7	20.7	30.3	31.3	95.9
(対)ニラ化成	14.0	20.7	29.8	31.0	95.4

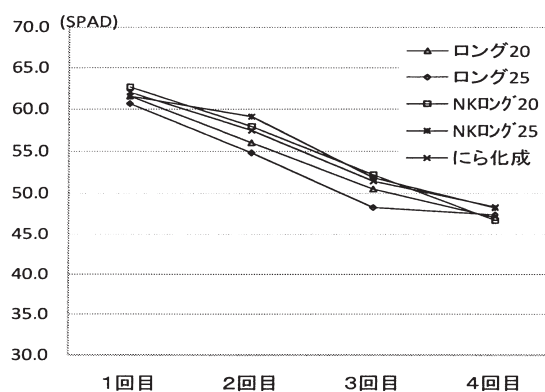


図2 葉色の推移